

研究主題「豊かな心を育む道徳教育の充実」

～「考え、議論する」道徳の実践を中心として～

桶川市立桶川西中学校

1 研究主題の設定理由

令和元年度の道徳の教科化の趣旨を踏まえ、教員の指導力と生徒の道徳的実践力の向上を目指し、全職員で組織的に取り組むこととした。本校生徒の課題として、自分の考えや心境を自由に表現したり発表したりする姿勢に欠け、道徳の授業をはじめとする議論の場において活発な意見交換が見られないことがあげられる。この課題に対し①考え、議論することを旨とした道徳の授業の実践と効果的な実施方法の検討、②教材・教具の作成、③全体計画・年間指導計画の作成、④評価方法の検討と通知表等の評価例文の作成、を全職員で取り組むことで克服が果たせると考え本主題を設定した。

2 研究の仮説

「考え、議論する」道徳の実践を中心として、意図的・計画的な学習を積み重ねることにより生徒の道徳的実践意欲が育まれ、道徳教育の充実が図られるだろう。

3 研究の経過



4 研究の内容

(1) 授業研究部会

① 授業研究部会の取組

- 考え、議論する道徳の実践に向けた毎週の授業の提案
- 実践報告書確認
- ローテーション作成 (年間計画・内容項目・ローテーション順を検討)

② 道徳の授業での様々な工夫

生徒が、ねらいとする道徳的価値を自分の課題として受け止め、豊かにいき

いきと表現してよりよく生きようとする意欲を育もうとする時間をめざす。

- ・ 多様な体験活動を効果的に関連させ、生かしていく工夫
- ・ 心に響く資料の選択及び活用、資料提示の工夫
- ・ ゲストティーチャー、ティームティーチング等指導方法の工夫
- ・ 「私たちの道徳」および「彩の国の道徳」活用の工夫

③ 道徳の授業に関しての運営

- ・ 全クラス火曜日2時間目に実施。ゆずり葉学級については、学級の実態に合わせた計画とする。
- ・ 教科書、ノート（B5が貼れるノートを各学年で購入し、活用。）を使用。授業者が作成したプリントもノートに貼る。ノートにまとめさせることで、道徳の評価の資料として活用しやすくする。
- ・ 指導力の向上のため、学年ローテーションの授業実践を2回実施。

④ 学年ローテーションについて

一人の授業者が同じ授業を各学級で行うことで、その授業の質と指導力の向上を図る。

- ・ ローテーション案は、各学年の道徳担当が中心となり、毎月の学年会にて提案をする。
- ・ 一つの教材を計5回実施するなかで、より良い授業展開を検討できる。ブラッシュアップした内容をもとに実践報告書を作成し、次年度へ有効に引き継げる。
- ・ 教材によっては教科的な専門性が高くなるので、各授業者のもつ専門的な知識経験を活用しやすくなる。（国際理解・公民・歴史・保健医療・自然科学・科学技術など）
- ・ 副担任もローテーションの割り当てに加えることで、複数の教員が生徒実態を把握することにつながる。
- ・ 教材研究を分担し、互いの負担を軽減する。1つの道徳の授業の教材研究に当てる時間を増やす。
- ・ 空き時間の教員で、お互いの授業を見合うことで、指導力の向上を図る。
- ・ 担任だけで授業をしていないことで『評価のしにくさ』が懸念されたが、教員間での情報交換により評価を行った。（口頭報告・名簿への記入・ノートやワークシートの利用など）

令和2年度 赤学年 道徳日程（ローテーション1）

- 1回 7月 7日 ローテ①
- 2回 7月15日 ローテ②
- 3回 7月21日 ローテ③
- 4回 8月25日 ローテ④ ※4回以降は予定です。
- 5回 9月 1日 ローテ⑤
- 6回 9月 8日 ローテ⑥
- 7回 9月15日 ローテ⑦
- 8回 9月23日 ローテ⑧

	①7/7	②7/15	③7/21	④8/25	⑤9/1	⑥9/8	⑦9/15	⑧9/23
1組	片岡	井上	七五三木	本木	石井	栗原	岡田	酒井
2組	酒井	片岡	井上	七五三木	本木	石井	栗原	岡田
空き	岡田	酒井	片岡	井上	七五三木	本木	石井	栗原
3組	栗原	岡田	酒井	片岡	井上	七五三木	本木	石井
4組	石井	栗原	岡田	酒井	片岡	井上	七五三木	本木
空き	本木	石井	栗原	岡田	酒井	片岡	井上	七五三木
5組	七五三木	本木	石井	栗原	岡田	酒井	片岡	井上
空き	井上	七五三木	本木	石井	栗原	岡田	酒井	片岡

- ・ 縦列を一つずつ下にすらす
- ・ 出張などがあった場合は、順番を相対で入れ替える。

片岡『22：ネバールのビール』
 酒井『17：日曜日の朝に』
 岡田『8：バスと赤ちゃん』
 栗原『10：壊れた掲示版』
 石井『14：ネット得棋』
 本木『3：挨拶しますか、しませんか』
 七五三木『7：黒い弁当』
 井上『27：日本の心と技』

(2) 全体・年間指導計画部会

① 教科化の趣旨を踏まえた、道徳科の質的向上、教科書の内容確認。

○ 道徳科の質的向上

道徳の教科化を踏まえ、行うべきこととして、道徳科の質的向上を目指

した。全クラスで年間35時間の道徳科の年間指導計画を確認するとともに、その質的向上を図るべく、指導内容の確認も行った。

○ 教科書の確認

学習指導要領の改訂で変更された内容項目を校内研修にて確認した。その後、令和元年度より実施する教科書の採択・決定を経て、教科書の教材を確認し、次年度への準備とした。年間指導計画の作成については、まずは新教科書の通りを行うことが妥当と判断し、次年度への準備とした。

② 年間指導計画の見直し・別葉の作成

年間指導計画については、本校における重点指導する内容項目や、目指す学校像、ローテーション授業での内容項目の分担などから、桶川西中学校の教育活動にあった年間指導計画の作成に向けて、各学年で見直しを始めた。また、新たに作成した年間指導計画について、生徒の発達段階や学校生活の状況を考慮し、1年間の課題から次年度に向けた修正を行なった。さらに、別葉については、各教科等における道徳教育に関わる指導の内容及び時期を整理した別葉の作成を重点的に行なった。

③ 年間指導計画・別葉の見直し

○ 年間指導計画の見直し

新学年担当でローテーション授業を実施する教材を決め、年間指導計画を修正した。年間を通した課題を踏まえ、次年度に向けた年間指導計画の修正を行なう予定である。

○ 別葉の見直し

各学年・教科担当による別葉の修正を行なった。特別活動では、学校行事や総合的な学習の時間の計画を作成ののち、新たに修正を加えた。

(3) 評価部会

① 次年度に向け、評価の方法・分担。評価例文の作成

○ 評価の方法・分担

評価部会や職員会議を経て、「ローテーション授業を活用しながら、担任がクラス全員を評価する」ことになった。ローテーションの授業中に、生徒からどんな発言等があったかを授業後に担任に伝える。(紙または電子ベースで渡す)→担任が他の教員から聞いたことや道徳ノートを参考にしながら、評価する。

○ 評価例文の作成

学校課題研究主任や道徳主任による研修等を踏まえ、評価部会の教員で評価例文を作成→評価部会で検討→学校課題研究主任の確認→完成

② 実施課題点の検討・改善案の準備

○ 課題点の検討・改善案の準備

- ・ 実施してみたときに評価しにくい→評価例文の文言等を変更する。
- ・ ローテーション後に授業の様子を担任に伝えるが評価につながらない→教師振り返りシートを準備することで評価しやすい項目を用意する。
- ・ 教師目線だけでなく、生徒が感じたことを評価できるようにする→学期の振り返り用紙に道徳の授業を生徒が振り返りできる欄を用意する。

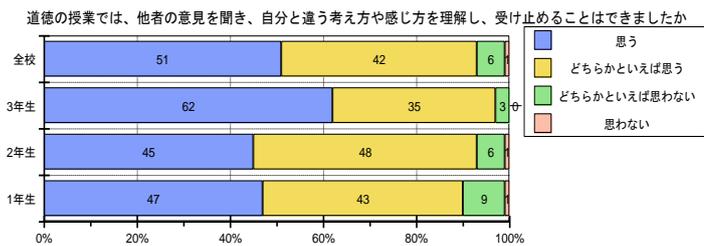
③ 課題に対する改善案の実施

○ 改善案の実施

- ・ 昨年度に比べ、評価が行いやすくなった。今年度は、新型コロナウイルスのため、話し合い活動などが一部制限されたので、例文を適宜、変更しながら活用した。
- ・ 生徒の学期毎の振り返りを実施したことで、生徒にとって、印象に残っている教材や何を学んだのかを確認することができるようになった。
- ・ 教師振り返りシートを実施し、ローテーション授業時の様子を担任が知ることができるようになった一方で、授業後に記録を残すため、負担が増えてしまった。今後、どの程度の記録を残すかが課題である。

(4) 調査研究部

生徒の実態や研究の進捗状況を把握するために、年1回のアンケートを実施した。おおむね高い数値を示したが、道徳の授業に対する姿勢や考え、議論する道徳の授業が実践されており、ある程度の効果を得られた。



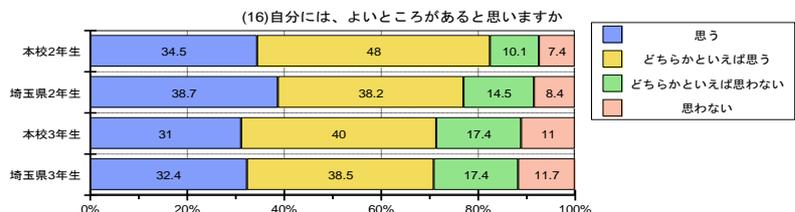
5 研究の成果と課題

本委嘱研究は、新学習指導要領への対応と道徳が特別の教科として実施されたことを踏まえて、事前からの準備とスムーズなスタート、計画的な実施を目指すとともに、これまで取り組んできた教科における「考え、議論する授業」を継承しつつ行ってきた。

本校では、道徳教育推進モデル校の委嘱を受ける前から、継続して研究を進めており、各部会で段階を追いながら授業の計画や実践を行ってきた。特に授業のローテーションは「考え、議論する」授業を実践するとともに、題材への教材研究が進み、指導力が上がったことをほとんどの教員が実感することができた。

道徳教育推進モデル校の研究1年目となった本年度は、それぞれの部会ごとに研究内容を総括するとともに、授業ローテーションの継続、評価シートの活用、実践報告書のまとめ、アンケートの集約と分析を行った。アンケートでは「道徳の授業では、他者の意見を聞き、自分と違う考え方や感じ方を理解し、受け止めることはできましたか」の質問に、「思う」「どちらかといえば思う」に93%の生徒が回答しており、「考え、議論する」道徳が実践されていることが読み取れる。また、埼玉県学力・学習状況調査の生徒質問紙調査から「(16) 自分には、よいところがあると思いますか」について、

県より高い数値を得ており、自己有用感や自己肯定感が育まれていることを確認できた。



本校はとても素直で穏やかな生徒が多く、道徳の授業に対する姿勢は前向きで、それはアンケートにも表れていた。数値上では微増となったが、本研究を通して「考え、議論する」道徳の授業は教員・生徒ともに浸透しつつあることは実感できる。これらの取組を継続して、本校の道徳的実践力をさらに向上させていきたい。